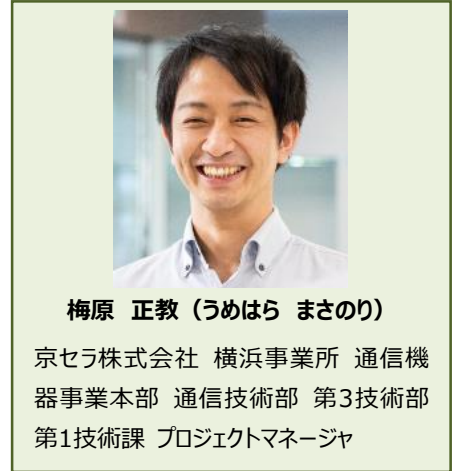


多様な業種連携によるLFP進展への期待

—京セラ株式会社 横浜事業所 通信技術部・梅原正教—

京セラにおいて私が所属している事業本部は、携帯電話に代表される通信機器の開発・製造を手掛けている。2022年度に農林水産省の「地域食品産業連携プロジェクト（LFP）推進事業」で実施されている「業種連携ネットワーク」には、情報通信技術（ICT）分野の参加メンバーとして、お声掛けをいただいた。本来の業務とは全く異なる分野のコミュニティに参画させていただき、各地域で課題を自分事にして活躍しているたくさんの方々と事例に触れて多くの刺激を受ける一方、デジタルとの融合でさまざまな価値を生み出せそうだという期待感も膨らんだ。本稿では、弊社のようなメーカーが参画するに至った経緯や協業の可能性、今後の期待などを記載させていただく。



梅原 正教（うめはら まさのり）

京セラ株式会社 横浜事業所 通信機器事業本部 通信技術部 第3技術部 第1技術課 プロジェクトマネージャ

◇京セラの通信の取り組み概要紹介

筆者は事業本部の通信機器を開発する部隊で、IoT機器の開発マネージャを務めている。IoTとはInternet of Thingsの略で「モノのインターネット」と訳され、インターネットにつながっていなかったモノをインターネットに接続し、新たな価値や利便をつくることを意味している。家の電気の点灯を検知することで住人が普段と変わらない生活をしているかどうか安否確認することなどが、その例だ。IoTを実現させるのに必要な通信機器の開発をしているが、IoTは機器だけあっても便益を実現できるわけではなく、正しく活用されてようやく価値としてユーザーに届く。先の例で言えば、電気の点灯を検知できるセンサーだけでは価値は生み出せず、点灯を検知して安否確認をしたい人（ニーズ）があって、初めて価値として認識される。

このため弊社は、自社製品の利活用シーンの模索を目的に、ifLinkオープンコミュニティというIoTの普及を目的とした一般社団法人に参加している。その中ではIT系にとどまらず、さまざまな業界の複数社と連携することで、新たな価値を生み出そうとしている。

◇LFPとの関わりの経緯

筆者はこれまで、仕事でも日常でも農業分野や食品分野とは無縁の世界で活動していたが、IoTの普及活動を行う中で、環境をテーマにしたイベントで当時LFPコーディネーターを担当されていた方にお会いする機会があり、そのご縁がきっかけで22年度の業種連携ネットワークにお声掛けいただいた。

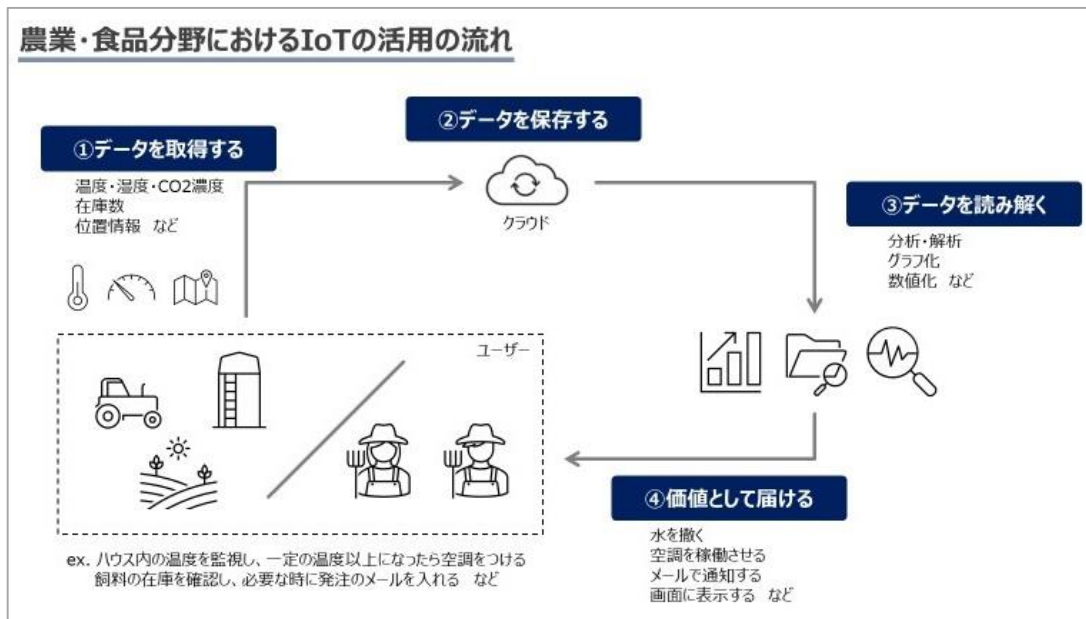
異業種の立場からLFPの活動に触れてみると、その理念や目的は「各社の経営資源を組み合わせ社会課題を解決する」というソーシャルビジネスといった点で一致することに気付いた。これは、先に述べたifLinkオープンコミュニティの意義・目的と同じで、この気付きから、その後、同年度に実施された「LFPトークカフェ」に積極的に参加し、たくさんの方々と交流する機会もいただいた。

◇弊社が取り組む事業との親和性

弊社は、22年に内閣官房から基本方針が示された「デジタル田園都市国家構想」の実現に向けて、自社の技術がその一助になることを理想としている。農林水産業や食品産業は、多くの場合これまでデジタル化があまり進んでこなかった分野であると認識しており、そのため、デジタル化による価値創出の伸びしろは非常に大

きいと推測している。また、IoTの得意分野である遠隔地の監視や検知などはまさに現場に最適であり、その点では非常に親和性があると言える。

例えば農業分野では、ハウス内の温度を監視し一定の温度を超えたら携帯電話に通知が来る、飼料の在庫を管理し発注が必要になったら自動で発注されるなど。また食品産業では、管理時・輸送時における温度監視をし、適正管理を記録、自動でレポートを出力するなど、HACCP（ハサップ）対応にも応用されている。これらが弊社のようなIoTといった経営資源を持つ事業者との連携のケースだが、その他にも、これまでつながっていなかった多様な業種、多様な事業者との連携を積極的に図ることができれば、相互の経営資源の活用（シナジー）は無限に広がるものと考えられる。



◇LFPに対する期待・希望

シーズ（技術）側のアセットを持っているわれわれのようなメーカーにとっては、現場でのニーズ（困り事）はまさに宝石の原石である。その意味では、LFPトークカフェのように現場の課題や現実を共有していただける場は、それだけで大きな価値となる。「どんなことで困っているのか、何がしたいのか」といった現場の情報と、「この世にはどんな技術があり、何ができるのか」という技術側の情報を交換する場は、とても貴重な機会だ。

しかしながら、そうした場が設けられたことで知見の拡大はできても、価値が創出されるまでにはまだ幾つかの段階が必要になり、定期的な情報交換だけでは、その先に進むのはなかなか難しいのではないかと推測する。

その上で、さらに先に進むために、リアルベースでの「雑談」の場を期待する。筆者の経験上、うまく事が進んだ例に共通すること、それは雑談の有無だ。雑談の中で、表面には出ない情報や、気になった点の詳細な説明など、相互理解がぐっと深まり、「であれば〇〇はどう？」とか、「それならうちで使える/うちの技術が使える」といった発想に飛躍することが起こる。これを私は共有した時間の密度の違いと捉えており、その密度を生み出せる空間を設定することは、それだけで大きな価値となり得る。

現在、市場において強みを発揮できるのは、かつてのインブルーメント（改善）モデルからイノベーション（革新）モデルに移行して久しいといわれる。一つの物事をとにかく磨き上げれば勝てた時代は去り、イノベーションすなわち価値を創造することに競争力が移行してきた。加えて、価値の多様化に伴い、非常に多様な社会課題も浮き彫りになっている。複雑な課題に対し単独で解決を図ることは困難であり、その意味でも分野を問わず多様な事業者が連携して社会課題の解決に取り組むことは何よりも価値のあることだ。LFPが「価値が生まれる場」の出発点になるよう、多くの場を提供して下さることを期待している。